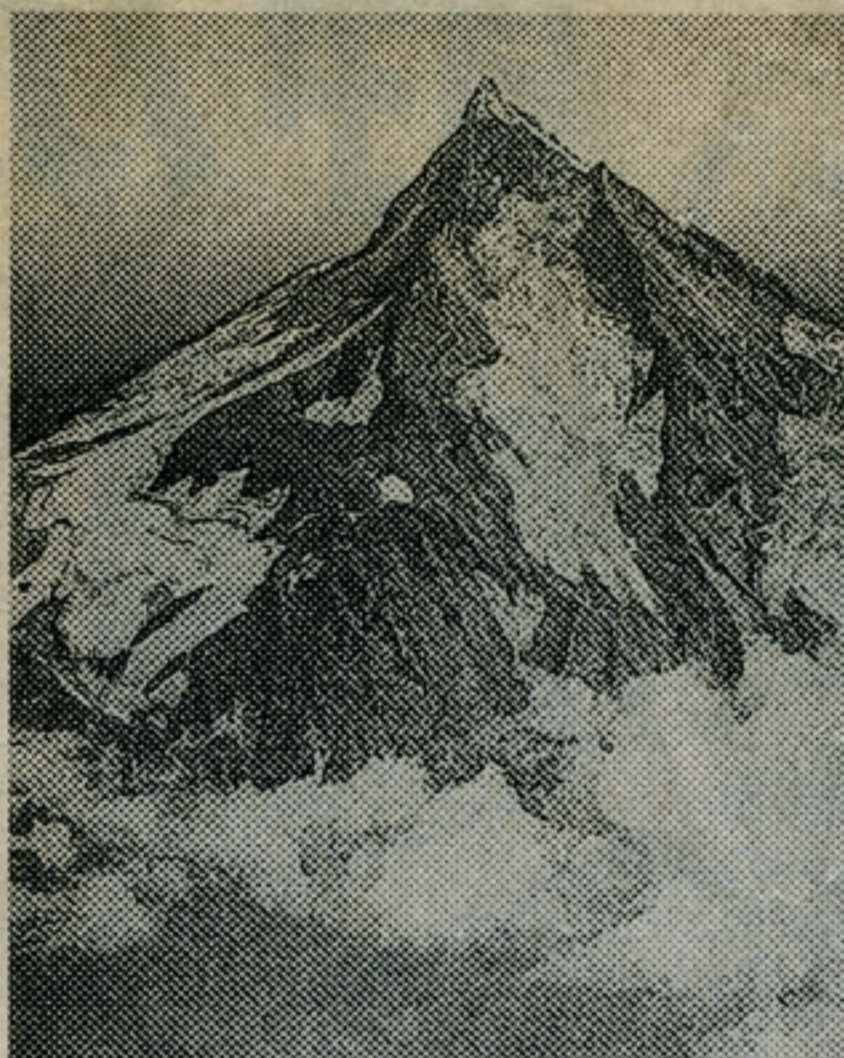


1999年(平成11年)8月4日(水曜日)

どこにもない山を描く 近藤正勝展



雪溪を抱いたように見え、触ばかりが目立って、決して白黒の山の絵(キャンバスにアクリル絵の具)に写したものでないことが分かる。また、山は白黒だが、

アラスカ、スコットランド、ニュージージーランドなどの山だが、絵は、どこにもない唯一の山を描いたものとしての独自の存在感をたたえている。

作者は一九六二年、愛知県尾張旭市生まれ。ロンドン在住。新作五点。



近藤正勝展は22日まで、コオジ・オグラ・ギャラリー(名古屋港区港町1、ジェティ・イースト3階、現代美術館内)052・654・5106。月・火曜休館。(洋)

1999年(平成11年)8月19日(木曜日)



近藤正勝「Mountain O」(1999年)

美術

◇近藤正勝展(22日まで、コオジ・オグラ・ギャラリー)名古屋港区港町1ノ7 ジェティ・イースト

い。それだけ日本は政治から自由でいいとも思ったり、日本の政治家には目先しか見えていない、ああ、この貧しさよと思ったり、複雑な思いであった。(児童文学者)

ト3階)

山岳風景を題材にした近藤のアクリル絵画は、「写真のよう」という言葉がぴったりするほど、再現的なものだ。雲海の上に突き出た山の頂、谷間に厚く残った雪、岩の細部の微妙な描写などが一体となって作者の計算通り、雄大さに引き込まれる。そこには、神秘的で畏怖される自然のイメージがある。それは、われわれ観客の欲望と懐かしさを満たすのに十分な理想的な山の「記号」となっている。

それもそのはず、近藤は、古い観光ガイドや美しい風景写真集に掲載された実際の山を借用し、模写したのだという。さらに、元の写真の縦を伸ばして山をより壮大にし、加えて、背景を空でなく平板な色面として描くことで(写真館でポートレートを撮影する時の背景に近い)、山の峻厳さ、崇高さを強調しているのだ。

ところが、遠くから見る時のそんな山の写実的イメージは、近くとむしる触覚的な筆跡、絵の具の物質性の方が印象的。近藤はそうした遠近における視覚のギャップ、距離感を楽しんでる節もある。目の前で強弱を刻みながら繰り返されるタッチの広がり別の視覚的な美しさを感じさせ楽しい。一九六二年、名古屋生まれ。(昇)